

第三十二回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

松井 裕美 著 『キュビズム芸術史 20世紀西洋美術と新しい〈現実〉』

(2019年2月28日刊 名古屋大学出版会)

松井裕美 まつい・ひろみ 神戸大学大学院国際文化学研究科専任講師

1985年(昭和60年)7月25日 34歳 京都府京都市出身

専門はフランス近現代美術史

2008年(平成20年)3月、東京大学文学部歴史文化学科卒業(学士取得)。2010年(平成22年)3月、東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美術史学専門分野修了(修士取得)。同年4月から2015年(平成27年)6月まで、東京大学大学院総合文化研究科博士課程・超域文化科学専攻比較文学比較文化コースに在籍。その間、パリ西大学ナンテール・ラ・デファン스에留学。同大学にて、2011年9月に修士号、2015年3月に博士号を取得。2011年度フランス政府給費留学生。2015年(平成27年)4月、日本学術振興会特別研究員(同年6月まで)。同年7月、名古屋大学大学院文学部特任講師(2017年3月まで)。2017年(平成29年)4月、名古屋大学高等研究院YLC特任助教(翌年9月まで)。2018年(平成30年)10月、神戸大学国際文化学研究科専任講師。

編著に *Images de guerres au XXe siècle, du cubisme au surréalisme* (Les Éditions du Net、2017年)。共編著に *Construction et définition du corps* (Les Éditions du Net、2015年)。共著・分担執筆に、『非在の場を拓く』(春風社、2019年)、*Modélisations et sciences humaines* (L'Harmattan、2016年)、*Picasso, Transfigurations, 1895-1972* (Hungarian National Gallery、2016年【イタリア語版:*Picasso, Figure (1906-1971)*, Skira、2016])、*Recension et réutilisation des savoirs et savoir-faire culturels* (L'Harmattan、2014年)ほか。訳書に、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『受苦の時間の再モンタージュ』(森元庸介との共訳、ありな書房、2017年)がある。

受賞のことば

本書は美術史の専門書ですが、様々な分野の方々にも読んでいただけたら、という願いを込めて執筆致しました。当初の目標はキュビズムの謎を紐解くことでしたが、その過程で、キュビズムの歴史が美術史だけにはおさまらないことに思い至りました。このため私の研究生活は、当初思いもなかった道筋をたどることになりました。解剖学の知の体系を検討し、前衛詩を読み、国内外の文学や科学史、ジェンダーといった領域の研究会で異分野の人々と出会い対話を重ね、資料を探して世界中を旅し、気がつけば視覚芸術の分野を超えた地平からキュビズムの文化と歴史を俯瞰し描き直すという本書の構想を持つに至りました。それは様々な方々との出会いとご指導、ご協力のおかげで実現したものです。この挑戦の末に、名誉ある賞を賜りましたことを誠に光栄に存じます。

《選考委員評》

野家 啓一

松井裕美氏の受賞作『キュビズム芸術史』は、ピカソが「アヴィニヨンの娘たち」を発表した1907年から、キュビズムの「死」が囁かれるようになった1947年前後まで、両大戦をはさんだ40年間の芸術運動を雄渾な筆致で描き切り、浩瀚な書物にまとめた文字通りの労作である。論述に当たって著者が採用した方法論は、英米圏の記号論的美術批評とは一線を画し、愚直なまでに具体的な作品分析を貫くことによって実証するという正統的な手続きにほかならない。他方で著者は、個々の作品が生み出された歴史的な脈、それを取り巻く時代思潮と批評的言説のネットワークにも広範な目配りをするのを忘れない。それらを通じて、ピカソの技法の発展過程が丹念にたどられ、変貌の道筋が鮮やかな軌跡として描き出される。すなわち解剖学、生理学、幾何学といった科学的知見を踏まえながら新たな身体表象を提起した「プロト・キュビズム」期、さらに人体比率のダイアグラムを利用しながら身体像を構成する「分析的キュビズム」期、そして平面を重ねて構築された形態として身体像が構想され、多視点的な表現が導入される「総合的キュビズム」期といった具合である。しかも、その過程と並行して、既成の女性像（裸婦像）に対するピカソの批判的見識が、ジェンダー、階級、人種といった社会的枠組みへの価値転換の希求にあったことが鋭く指摘される。本書においては、まさにキュビズムという多面的に乱反射する芸術運動を通じて、20世紀という戦争と革命と科学技術の時代そのものが浮き彫りにされているのである。著者の博識と力技に敬服せざるを得ない。

その上で、一言だけ望外の言を付け加えておきたい。これは哲学研究者の僻見かもしれないが、せっかくなので「両大戦間期」という思想的に最も魅力的な時期（20世紀を代表する哲学書のほとんどはこの時期に書かれた）に光を当てながら、哲学・思想の領域への言及がいささか物足りないことである。もう一歩突っ込んだ考察がなされていたならば、第IV部・第V部で描かれた芸術家たちの「不安の表れ」や「近代文明への不信感」といった月並みな表現にも奥行きが得られたのではないかと惜しまれる。ただしこれは、潜在能力を十分に備えた年若い著者への期待の表れと受け止めていただければ幸いである。

選者は、ピカソのキュビズムの絵画の幾つかは受賞作の口絵で初めて見、グレーズ等の画家に至っては、その名前すら聞いたこともなかった門外漢に過ぎない。しかし本書が学術的労作として傑出していることは、一読して認めざるを得なかった。抽象芸術が好きだった少女が、東大やパリ西大学で美術史を専攻、様々な試行錯誤の不安と喜びの中で、多くの研究仲間と出会い、国際的な諸学会で発表し、自ら研究会も主催し、欧米の諸都市を旅して未刊行の作品や資料を博搜、大部の博士論文を3年半で書き上げ、帰国後も活発な共同研究をしながら独自の考察を進め、今30代前半でここに最初の独創的な大著を上梓した。そのことに、慶賀と讃嘆の思いを禁じ得ないのである。

本書の独創性は就中、次の点にあるだろう。すなわち、美術解剖学や人体比率の科学的知識がキュビズム誕生の根底にあることを、ピカソらの作品の精緻な分析を通して明らかにした点である。この方向の研究は世界的に、ペペ・カーメルと松井氏をもって嚆矢とするようだが、前者が第一次世界大戦前のピカソしか扱っていないのに対し、後者はよほど広範に、第一次大戦以後第二次大戦前後までをも考察の対象としている。

また単に図式的なもの一般を指すとされて来たダイアグラムを、異なる現実の描写方法を並置することで新たな認識を与える装置と捉え直し、その種のダイアグラムとしてキュビズムの意義を洞察する点にも、本書の独自の貢献があるに違いない。そうした視点から、前衛芸術家としてのキュビストは、芸術同様、戦争の前線も好む好戦主義者だとか、従軍画家として戦争のプロパガンダに利用されたとか、あるいはまた難解さを衒うスノップに過ぎないといった偏見に対しても、オルタナティブが呈示される。彼らは他方で、戦地の泥と肉体が融合する反戦的なキュビズム芸術も生み出し、ダイアグラムの難解さを逆手に取って反ファシズム運動の符牒ともなろうとした。そのことが、多様な作品の読み解きや、芸術家・美術史家の発言から明らかとされる。本書は、こうした時代思潮や政治社会の状況にも目配りし、美術史の高度な専門書という枠組みをも超えていくのである。今後ともスケールの大きい活躍が期待される、大型新人の登場を慶びたい。

なお、女性研究者の受賞は18年ぶりとなる。人文学の分野でもますます女性の活躍が盛んとなる1つの予兆ともなれば、これまた慶賀に堪えないことである。

松井裕美『キュビズム芸術史』は、手に取ると、内側に文章が流れ論理を持ち展開するが、その各々の叙述とともに、最初からとても多くの絵や写真や図版が伴って記録されている。本書は言語だけの叙述ではなく芸術を伴っている。ただし、その美しさは、感動的だが、かといって簡単な纏まりや決まった風景、一定の人間像ではない。どこか生が描かれていても重なった人称性を持った図形・立体像のような在り様で、それが見る者につよく顕れ出て来る。そこに「キュビズム」（立方体を伴った幾何学的な表現）がある。

本書は、20世紀初頭にピカソやジョルジュ・ブラックたちにより始まった「キュビズム」といわれる表現の運動が、第一次・第二次世界大戦の間どのように展開したかを、いろいろな形態として、また含意された認識について種々に辿り、とらえる。キュビズムは19世紀までのように決まった形ではなく、決まりをこわしながら多数の様態を描き出す。だが、拡散してしまうのではない。解体もあるが形態への動きもあり、あらたな秩序への運動でもある。その具体的な姿や歴史的な在り様は、読者がそれぞれ見ながら辿ることになる。

キュビズムとは何であり、彼等は何を行ったのだろうか。文化史・哲学的な視点から本書を再把握してみると、この両大戦間の時期、ハイデガーは全くおらず、よく現れる哲学者としてベルクソンがいる。彼は物事をただ単子や力学に還元することなく、^{モナド}生の飛躍ととらえる。そこにあるのは理性だけではなく感情や直観からの働きである。この動きは、哲学書でいうとカントの『判断力批判』について和辻哲郎文化賞第18回受賞者である佐藤康邦氏が扱ったものと同じで、それを松井氏はさらに芸術においてとらえたとも言える。これはさらに哲学としてはカッシーラーを引きながら三木清が「構想力」として見出したもの、別言すれば坂部恵・藤井貞和氏が文学に見出す「多人称性」にも繋がる。

本書は、感情や直観からの働きとしてのキュビズムの運動を20世紀における具体的な画像のうちにとらえた。この運動は、さらに20世紀末、21世紀には、どのように形を変えて展開するのだろうか。そもそも、どんな基礎がそこにあったのか、あるべきなのか、また美しさとは一体何なのか。松井裕美氏は、こうした問題に向けて哲学や倫理学、さらに文化論へも大事な示唆を与えて下さっている。